平成21年4月12日
第 18 号
（年一回発行）
京都教育大学
附属京都小学校
東櫻同窓会

東櫻だより

〒603-8164
京都市北区紫野
東御所田町37
TEL
(075)441-4166～7
発行人 千 玄室会長
題 字 千 玄室会長
印 刷 中西印刷

―「東櫻同窓生のつどい」報告号―

母校校舎屋上より小運動場を望む

東櫻同窓会ホームページアドレス http:// www.touou-dousoukai.jp/

御挨拶

東櫻同窓会副会長　堀場　雅夫

三年毎の東櫻同窓会総会を今年も盛大に開催できたことを、喜び合いたいと思いますとともに、実行委員会を担当いただいた昭和五十三～五十五年卒の皆さんに大変ご苦労をおかけした事に心よりお礼を申し上げたいと存じます。

総会後の総括を伺いますと、「学校卒業以来、学年で集まることがなかったが、これを機会に定期的に集うようになった」、「いいきっかけを与えていただいた」、「総会の準備を進める取組そのものが同窓会活動だった」といった感想が語られており、大変心強く感じた次第です。これからの当番年次もぜひよろしくお願いいたします。

さて、八十余年の人生を振り返り思うのですが、学校で先生から受けた影響が如何に大きいか、少なくとも私は恐ろしく感じる程です。もし附属小学校へ通学出来てなかったらきっと私の人生は全く異なった道を歩んでいたでしょう。

五年生の時だと思いますが教生の先生に放課後、自作の無線操縦の電気機関車を理科室で運転させてもらいました。感激の余りその夜は寝られませんでした。以後今日まで、理科少年が続いています。近年、モンスターペアレントなる保護者の出現を聞きますが、保護者は先生にもっと信頼と尊敬の気持ちをもっていただきたいと強く思っているところです。

会員の皆さんは、東櫻だより等でご存知でしょうが、附属京都小学校は附属京都中学校と小中一貫校となり、平成十七年度から校長先生がお一人に、十九年度から育友会も合体すると言ったように、着実に一貫校としての歩みを進めておられます。今後の同窓会のあり方も皆さんのご意見を伺いながら、考えてまいりたいと存じます。会員の皆様のご健勝お祈り致します。

御挨拶

学校長　田岡　文夫

東櫻同窓会会員の皆様方には、本校の教育活動に対しまして、平素より多大のご支援を賜りまして感謝に堪えない思いでおります。改めて厚く御礼を申し上げます。

さて、私、本校に校長として赴任、お蔭をもちまして一期二年を大過なく終えることができ、現在二期目、通算三年目を勤めておりますが、本校にとり、本学にとり、また教育にとり、厳しさが一層強まってきておりますことを痛感致しております。しかし、これ危機と考えるところに本校、本学の将来はなく、機会と受け留めねばならないと考えております。

こうした認識に立ち、本学におきましては附属学校改革特別委員会を立ち上げ、附属学校運営の抜本的見通しに着手しております。また附属学校部、正副校園長会議、教育実践総合センター教育研究交流会議等におきましても取組を加速しております。その成果として、来年度より本校教員の独自採用を開始致しますとともに、大学と附属の教育と研究における連携強化を通して、教員の質の一層の向上に向けた体制整備を急いでいるところであります。

本校自身の取組として進めて参りました文科省研究開発学校指定を受けての「『九年制義務教育学校』設立に向けた教育システムの確立」に関する研究も二期通算六年目の、最終年を迎えております。お蔭をもちまして、一定以上の成果をあげることができました。こうした研究継続の必要性を十分認識致しておりますが、研究から実現へと歩みを進めるべき時期が近づいておりますことにご理解を賜りたいと存じております。会員各位には一層のご協力をお願い申し上げる次第です。

附属京都小学校「東櫻同窓生のつどい」のご報告

実行委員長　西村　祐一

平成二十年六月二十一日（土）午後四時三十分から京都ホテルオークラにて三年ぶりの「東櫻同窓生のつどい」が開催されました。今回は昭和五十三年、五十四年、五十五年の卒業生が幹事学年として、企画、運営をさせていただきました。幹事学年制を採るようになってから四回目の開催となります。三年前に実行委員会を発足させ、何度も会議を行い、当日に向けて準備を重ねてまいりました。前回のつどいに初めて出席し、先輩方の頑張っておられる姿を見て、私達も良い会にしなければいけないとの思いでプレッシャーを感じておりました。

当日は目標の三百人には届きませんでしたが、二百七十九名の方にご出席いただき、盛大な会を催すことができました。今回の最高齢のご出席者は大正十四年卒の市和顕様で、九十六歳ということです。紫野高校の理科の先生をされていたそうで、附属京都小学校の卒業生の中でも多くの人が教えを受けられたようです。

当日のスケジュールを簡単に振り返りますと、物故者への黙祷の後、総会が開かれました。堀場雅夫副会長に議長をお願いし、滞りなく無事終了しました。役員五人はいずれも再任されました。

続いて、アンサンブル東櫻によるコーラスを聞かせていただきました。今回は「浜辺の歌」「人生の扉」「千の風になって」の三曲を歌っていただきました。日頃の練習の成果を発揮していただき、すばらしいコーラスでした。

その後、田岡文夫母校校長からご祝辞をいただき、鏡開きの後、大倉治彦副会長の乾杯のご発声で、懇親会が始まりました。おいしい料理とお酒をいただきながらの暫しの歓談の後、福引き、恩師紹介と続きました。

福引きは賞品数を絞りこみ、予定した時間内で終えることができました。千玄室会長の色紙は元副会長の大石純氏が引き当てられました。

続いての恩師紹介は恒例の迫田恒夫先生（昭和二十四年卒）に行っていただきました。今回はご来賓として現校長の田岡文夫先生、副校長の多田光利先生、三光会からは安田祐治先生、畑井多津子先生、花坂雅夫先生、今西幹郎先生、渡辺武野先生、田中収先生、栗山正則先生、藤本榮樹先生、村岡弓子先生、倉中増夫先生、岩渕信明先生、木下由利子先生、島田尚夫先生（母校への着任順）の十三名の先生にご出席いただきました。懐かしい先生方にお会いできて、大変嬉しく思いました。

さていよいよ昭和五十三年卒の吉阪一郎氏率いる、能楽五人囃子の登場です。楽器紹介、謡と囃子の説明、舞の説明などを取り入れながら、「早苗」「小督」「乱」の三曲を演じていただきました。大変緊張感のあるすばらしい舞台でした。三十分ほどの時間でしたが、年齢、世代に関わらず、伝統芸能の世界を間近に感じることができ、大変好評でした。

楽しい時間もあっという間に過ぎ、校歌斉唱、次期実行委員への引継ぎがあって、午後八時過ぎに「東櫻同窓生のつどい」は終了しました。

何かと不手際の点も多々あったとは存じますが、みなさまのおかげをもちまして、何とか無事終えることができました。昭和五十三年、五十四年、五十五年の実行委員一同、お礼申し上げます。

また今回幹事学年となったことで、卒業後初めて学年同窓会を開き、名簿の整理ができ、旧友の近況を知ることができたことは非常に有意義であったと思います。また幹事学年三学年で、一つのことを成し遂げられたこともすばらしいことでした。年賀状にも「三学年で合同同窓会をしましょう。」との言葉も見られました。三年後の「東櫻同窓生のつどい」がさらに盛大な会になりますことを願って、報告を終わります。

最後に福引きの景品をご提供いただきました方をご紹介いたします。

1 色紙「富貴是吉祥」
東櫻会同窓会会長
千 玄室様
昭和十一年卒

2 ブロンズ「闘争」
元校長 山崎正義様
昭和十七年卒

3 会津塗手許箱「さが野」
元校長 松井榮一様
昭和二十年卒

4 ゴルフボール 二ダース
大倉 健様
昭和五十三年卒

5 栃尺〇五寸拭き漆丸盆 一点
西村祐一様
昭和五十三年卒

6 ルノワール・国際マンガミュージアム観覧券 一セット
河村恭代様・真司様
昭和五十三年卒

7 サプリメント詰め合わせ 一箱
奥沢正紀様
昭和五十三年卒

8 万歩計 二点
竹之内剛様
昭和五十三年卒

9 ショール 一点
毛利泰巳様
昭和五十四年卒

10 電動歯ブラシ 一点
中野 浩様
昭和五十四年卒

11 京都菓子（俵屋吉富） 三点
石原義章様
昭和五十四年卒

12 ゴルフグッズ 一点
鍛冶美里様
昭和五十四年卒

13 化粧品 二点
大倉 博様
昭和五十四年卒

14 ネクタイ 二セット
小野 学様
昭和五十五年卒

15 DS地図ゲーム 一箱
今井 努様
昭和五十五年卒

16 プラダ サングラス 一本
龍見浩二様
昭和五十五年卒

17 五建ういろ詰合わせ 一箱
谷川博一様
昭和五十五年卒

18 十二段家詰合わせ 一箱
西垣光浩様
昭和五十五年卒

19 京野菜のど飴詰合わせ 二袋
筑摩 寿様
昭和五十五年卒

20 お食事券 一枚
京都ホテルオークラ様

21 月桂冠薦被り 二樽（鏡開き用）
大倉治彦様・博様
昭和四十六年卒・五十三年卒

平成二十年～二十三年 新常任理事の紹介

平成二十年八月二十四日、母校会議室において常任理事会が開催され、これから三年間の常任理事会の組織が決まり、総会にて承認されました。新しい常任理事を紹介いたします。（敬称略）

常任理事長
出木谷寛（昭和四十五年卒）

常任理事
名簿委員会
山本あや子（委員長・昭和三十四年卒）
西村国子（昭和三十二年卒）
鷲田憲子（昭和三十五年卒）
梅垣智子（昭和四十五年卒）
押谷敏之（昭和五十一年卒）
筑摩 寿（昭和五十五年卒）

行事委員会
荻野晋也（委員長・昭和四十七年卒）
釈 博司（昭和二十三年卒）
料治公俊（昭和三十三年卒）
柱本めぐみ（昭和四十六年卒）
中野 浩（昭和五十四年卒）
鍛冶美里（昭和五十四年卒）

広報委員会
松井榮一（委員長・昭和二十年卒）
波多野精一（昭和二十一年卒）
三柴 強（昭和四十一年卒）
大塚素子（昭和四十九年卒）
岡本文雄（昭和五十二年卒）
西村祐一（昭和五十三年卒）

ホームページ委員会
宮崎悟郎（委員長・昭四十五年卒）
中西秀彦（昭和四十四年卒）
河合 淳（昭和四十七年卒）

会計理事
野村英男（委員長・昭和十七年卒）
布施大策（昭和四十三年卒）
多田光利（学校）

庶務
迫田恒夫（委員長・昭和二十四年卒）
山脇豊次（昭和二十四年卒）
田中正也（昭和四十九年卒）

五・六年生が中学校域で

副校長　多田　光利

東櫻同窓会の皆様におきましては、益々お元気でご活躍のことと存じます。また遅くなりましたが、六月二十一日の総会も大変盛大な会となり、役員の方々をはじめ実行委員の方々もホッとしておられることと思います。

小学校も「九年制義務教育学校設立に向けて」目に見えての大きな変革ではないのですが、着実にすすんでいます。平成十九年度の京都中学校の耐震補強を伴う改修工事で、中学校校舎本館に中等部の小学五年生、六年生、中学一年生が入る教室ができあがりました。そこで、昨年度末頃から京都中学校・京都小学校両校の運営企画委員会で原案を作り、合同職員会議、合同研究会を経て、小中育友会、小中教育振興会などの承認を得、保護者説明会をもって、六月二日から、小学五年生、六年生が中学校校舎へ登校することとなりました。小学校にとって特別な記念日となる六月二日に先立って、五月三十日には、小学校職員室の教員座席の入れ替えも行いました。初めて五、六年生が中学校へ登校する朝、中学校の玄関に立ち登校してくる五、六年生を見ていると、どこか嬉しそうで和やかな雰囲気が感じられました。それに反して、ふだん賑やかな小学校正面玄関はひっそりとしていました。また、五、六年生の放送委員会の子ども達が担っていた朝の校内放送も流れないので、いっそう静かで子ども達がどこにいるのかという錯覚にさえ陥るような雰囲気でした。しかし、五、六年生が完全に中学校域で学習し生活するには、まだまだ解決しなければならないことがあります。理科や音楽、図工などの学習で使用する特別教室の使用割り当てもその一つなのですが、今、最も高いハードルとなっているのは、「給食」のために、小学校域へ戻らなければならないということです。そのため、四校時が三十分設定になっています。九月になり、両校の運営企画委員会で「給食」というハードルをどのようにクリアーするか話し合いました。小学校の給食室で調理されたものを中学校へ運搬するなど様々な方法を考えましたが、その結果、衛生面や安全面などを最重要とし、現在京都中学校が実施している外部の給食業者に委託する形で試行してみることになりました。そこで、まず十月には小学校教職員による給食試食を、小学校在籍児童の保護者の方で希望される方にも試食をしてもらうという機会を設けました。全般的には評価は高く、ただ小学校の給食室で作られるものよりも味付けが濃いという意見もみられました。その点を改善してもらうと

いうことで、十二月と年を越した二月には、五、六年生が二回ずつ中学校教室や中学校ランチルームで給食を試食するということを実施しました。そして、平成二十一年度四月から、給食を中学校の教室やランチルームで食べることで、五、六年生の中学校域での生活における課題の一つである「給食」、それに伴う四校時の三十分という授業時間は、解決されるであろうという非常に明るい見通しがもてるようになりました。

十一月十四日（金）、十五日（土）に京都府教育委員会、京都市教育委員会の後援を得て全国研究協議会を開催いたしました。両日を通じて延べ約一千人の参会者がありました。

十四日（金）は、全体会で総論を発表した後、二月に京都小学校と京都中学校で作成した小中九年間の「学習指導要領」に基づいた授業を公開しました。この「学習指導要領」は、初等部（小学一年～四年）、中等部（小学五年～中学一年）、高等部（中学二、三年）それぞれにおいて教育課程の特質化を図り、確かな学力をつけるために教科内容の効率的な配列と各学年部間のスムーズな移行について検討しまとめたものです。授業後、各教科の分科会と障害児教育の分科会、小中一貫教育の分科会を開催し、府教委、市教委の指導主事の先生方や、京都教育大学の先生方の指導助言もいただきました。十五日（土）は、新教科「アントレプレナー」、「サイエンス」、「ランゲージ」の生徒発表を行いました。アントレプレナーの発表では、『ニュー文具』の商品開発の授業実践の様子を六年生が発表しました。サイエンスでは、五年生がロボットの授業の様子を紹介し、苦労した点や工夫した点を発表しました。

高等部の生徒によるランゲージの発表では生徒達が谷川俊太郎の『生きる』を中心に、生きるということ、生かされているということを『生まれてきてくれてありがとう』という言葉に思いを託し、朗読という形で発表しました。参会者の中には涙を流される方もあり生徒達の取り組みに大きな拍手をいただきました。

「『九年制義務教育学校』の設立に向けた教育システムの確立」に関する文部科学省の研究開発指定も平成二十年度をもって終了します。この研究開発指定は二期六年間です。二十一年度以降は、文部科学省通知による「教育課程特例校の指定」を申請し、これより先六年間を更なる研究として、今までの取り組みを一層深めていこうと考えています。

そして、この二、三年で完成させたいのは、新町通をまたぎ小学校と中学校をつなぐ陸橋の建設です。準備委員会を設立し進めていこうとは思っているのですが、同窓会の方々にも、是非様々な面でご協力いただけると大変ありがたいと思います。

◆年次だより

■昭和十二年卒――

緑の美しい季節に三年に一度の東櫻同窓会に笑顔が集った。年を重ねると明日のことより今が大事に思えて久々に顔を揃えた八名は、大井・尾田・落合・畑井・堀場・眞坂・武藤・梶山。卒業以来の顔もあったが皆昔のままの顔であり心である。楽しい余興の能の五人囃子コンサートの音色がいつまでも心に残った一夜であった。

（梶山千鶴子）

■昭和十四年卒――

新櫻会

我がクラスは年齢八十二歳、生存率男性四十七％、女性六十四％になりました。クラスの諸々は、女性の福井さんが労を厭わず面倒をみてお世話下さるので恵まれています。

クラス会は昨年五月ブライトンホテルで行いました。出席者十五名、遠くは前橋から、また体の悪い人も参加しました。各人歩んできた道は違い、今の行き方も十人十色ですが、皆同等の立場で歓談し、また般若心経印刷物を配る人もいました。昼食から六時まで楽しく過ごし、心は癒されました。

福井さんの織物工場へ見学に行く者もいました。工場では天井から多種多量の糸が織機に繰り出され、紋紙で制御されて美しい西陣織の帯や衣類が作られていました。

（坂本誠之）

■昭和十五年卒――

附友会

私達は、卒業して六十八年になります。毎年クラス会を開いていますが、関東や九州からの参加者もあり、今年は男子七名、女子十一名が集まりました。お互いに元気で出席できたことを祝福しながら、楽しい会話がはずんでいました。この会が来年もまた開催できるよう、各自が健康に留意して欲しいと願いながら解散しました。

（森本皓昭）

■昭和十七年卒――

午己会（平成二十年度）

九月二十四日、ホテル日航プリンセス京都で十七名が集った。当日直前に世話役が急性肺炎で入院とのハプニングがあったが（十一月十二日無事退院）、参加者は七十余年前の事を思い出し歓談会食の後なお話し足りない分、場所を替え喫茶しながら時が経つのも忘れ語り合った。年のせいか集合写真を撮るのを忘れました。

（野村英男）

■昭和十八年卒――

紫櫻会（平成二十年度）

十月四日、からすま京都ホテルで開催。関西在住並に東京方面からの参加者もあり出席者は十九名。今尚かくしゃくとして居られる泉先生をお迎えし「御言葉」と元気を頂き互いに近況を語り合い楽しい一時を過ごし来年の再会を約して散会しました。次の日有志で高浜方面を周遊、元臨海学舎「余米旅館」を訪問し往時を偲びました。

（小松洋二）

■昭和十九年卒――

例年十一月上旬開催されているイロハ組同期会は、今年も十一月十日にタワーホテルで開催。三十二名が集まり、旧交を温めました。

皆七十七歳を過ぎ、それぞれ故障を抱えていますが、それでも元気で、来年十一月十一日（水）に同じホテルでの再会を約して解散しました。

（武居三郎）

■昭和二十二年卒――

トッホホ　二二八（いぬい会）

私達、いぬい会のメンバーは昭和十六年、前年迄の尋常小学校が、国民学校と名称が変わり、国語の教科書もサイタサイタからスメススメ、ヘイタイススメと軍国調になった時に入学しました。十二月八日に太平洋戦争が始まって音楽授業も、ドレミは外国語でアルという理由でハニホヘトイロハに変わる始末でした。いぬい会のメンバーの中には二年生で習った「お馬の親子」をホトトトイトトトで始まり、トッホホトッホホニニハで終わる全曲をこの戦時音符（？）で歌える人が居ます。

五年生で終戦、地方に疎開していた学友達も帰ってきて六年生になった時ＧＨＱ（連合国軍最高司令部）のお達しで新学制に変わり「六・三制野球ばかりが強くなり」と川柳に謳われた今の学制になりました。ですから私達が附属中学で始めての入学生です。この会は一年半置きに集まり今年も三十人が集まり大いに楽しみました。

（樋口哲子（旧姓吉田））

■昭和二十三年卒――

「附三会」は観光シーズンを避けて平成二十年六月二十一日に東山の料亭花楽で開催されました。

「梅雨の晴れ間」にも恵まれ、遠来の宿泊者も加わって全員の近況報告で旧交を暖めました。当日はホテルオークラで「東櫻同窓会

のつどい」も開かれていまして、二次会を同ホテルに移して終了後同会に出席する事もできました。

（野村 透）

■昭和二十四年卒――

下呂・高山へ泊まりがけで出かけてから早二年が経ちました。また旅に出かけようやと言うことで、秋深い十月下旬ごろに、信州の秘境を周遊したいと考えています。白馬八方温泉に泊まり、高瀬・戸隠などを巡るというプランです。八月にはお手許に詳しい案内をお届けしたいと考えています。前回参加の加地和氏、木村威氏が亡くなられ、今回ご一緒できないのは誠に残念でありますが、前回の四十一名を超える出席を期待しています。（東俊二・北崎幹也）

■昭和二十六年卒――

附属小・中学校同期会

昭和二十六年に小学校を卒業した我々は、当時、中学校の第六期生として、現・附属京都小学校の敷地内の校舎に同居して学んでいましたので、附属小・中合同の同期会として、中学卒業三十年目の昭和五十九年からオリンピック年の九月・第二土曜日に開催することにしています。※還暦を迎えた五回目から冬季オリンピックの年にも開催することにしています。

十回目となる今回は、平成二十年九月十三日、京都ブライトンホテルで開催しました。男性二十八名、女性十六名、計四十四名が出席、吉川・畑井両先生にもご参加いただきました。二次会は恒例となっている、祇園の廣島家さんを訪ねました。

今年は我々の大半が古希を迎える年で、母校訪問などの特別企画の案も出ましたが、日程の都合で実現しませんでした。近年、参加者数も減少傾向にあり、全員からのアンケートをとり、今後の企画の参考にすることにしています。

（広報担当）

■昭和二十九年卒――

十月四日、ホテル日航プリンセス京都にて小・中学校合同の同期会を開催しました。回を重ね二十四回目となりましたが、毎年四十名近くが集まり、今年は、上原勉先生、吉川禮三先生をお招きし、故人に黙祷の後、再会をしたことを喜び、各人がこの一年の近況や抱負を述べ、楽しい数時間を過ごし、その後、ホテルのバーを借り切っての二次会を行い散会しました。

（笹谷敬二）

■昭和三十年卒――

蜂須賀弘久先生の思い出

先生のご逝去を知り、驚きと共に生前の先生の笑顔と懐かしい思い出が甦ってきました。先生にとって初めての卒業生となった私達のクラスには、その後も同窓会の度にご出席いただき、特に、卒業三十周年の時には、卒業時に書いた「三十年後の私」という作文を持ってきていただき、懐かしい小学校の教室で久しぶりに先生の授業を受けながら、現実とのギャップに大笑いしたことを思い出します。私も還暦を過ぎ、今の世の中の風潮をぼやきながら考えるのは、小学校時代先生に教わった「明るく元気に。他人を思いやる気持ちの大切さ」です。著書「南極からの出発」を拝読し、先生の数々の輝かしいご業績の根底にはいつも人々に対する愛情が満ち溢れていたと再認識いたしました。このような素晴らしい先生に教えを請うことが出来た幸せをこれからも生かし過ごしていきたいと思います。蜂須賀先生有難うございました。

（伊藤 暁）

■昭和三十三年卒――

気がついてみますと、今年は小学校を卒業して五十年目、あの頃の楽しい思い出はまるで昨日のこ

とのように思われます。

関東在住の方々と学年会を九年前から催すようになり、昨年は花坂先生にも出席して頂きました。

今年も四月十二日、汐留のコンラッド東京で京都からの参加者もあり、楽しい一時を過ごしました。

（西田美代子）

■昭和三十四年卒――

四十六年ぶりの修学旅行

十一月二十九、三十日に昭和三十四・三十七年附属小・中学同窓会の一泊旅行を行いました。中学校を卒業してはや四十六年、小学校から数えるとなんと約五十年となります。実はこの「修学旅行」、昨年に開かれた還暦記念同窓会のパート2にあたります。

恩師の山川先生もご参加いただき、総勢三十四名が静岡県「ヤマハリゾートつま恋」に、関西組はバスで、関東組は新幹線で集合しました。夕食パーティでは中学校歌を大きな声で斉唱し、二次会のカラオケでは修学旅行の「枕投げ」以上に大騒ぎし、三次会では思い出を夜遅くまで語りあいました。

これも永久幹事長（今回から終身と決定）の三宅利幸君のもと、カラオケ幹事、地区幹事、番頭、女中頭とそれぞれ担当の皆さんが大いに奔走して下さったおかげです。とても楽しくて、懐かしくてさっそく修学旅行第二弾をとのリクエストが殺到しています。

（大森光枝）

■昭和四十六年卒――

二〇〇八年六月二十一日の東櫻同窓生のつどい後、学年会を開催。この日はダブルヘッダーだ。柱本めぐみ嬢の鶴の一声、「どうせなら学年会もやろう！」と、京中も桃中も高校も同期が集まる。二十四名！小中高どこで一緒やったっけ？忘れた～我らも五十に突入す。

（絹川雅則）

■昭和四十九年卒――

二〇〇八年四月十二日（土）、京都ホテルオークラで京都、桃山の合同同窓会が開かれました。

両校あわせて八十名の参加があり、小学校卒業以来会っていない人（三十四年ぶり？）、体形（全体的にはふっくら）や髪形（？）がずいぶん変わっている人がいたりして、名前がすぐ出てこなかったりしましたが、すぐに皆思い出し、なつかしい学校時代にもどって話に花が咲いていました。

また、当日と翌日には「附属カップ二〇〇八」と銘打って、皇子山カントリークラブにてゴルフコンペ（二日間開催）とボーリング大会（当日のみ）も開かれ、楽しい一時を過ごしました。

次回は全員が五十歳になる二〇一二年に開催しようということになっており、以降、オリンピックの年には開こうと考えております。

最後に同窓会開催にあたり、名簿整理や参加呼びかけにお手伝いをいただきました方に厚くお礼申し上げます。

（雑賀和彦）

■昭和五十六年卒――

二〇〇八年十一月八日、新風館胡同マンダリン（京都市中京区）にて開催。参加者は三十三名。

私たちの学年は、小学校卒業以来一度も同窓会が開催されたことがなく、二回目の成人式、アラフォー世代となったのを機会に、初めての同窓会を開催することとなりました。

連絡先不明な同級生が多かったのですが、一人の同級生から現在交流がある同級生の連絡先を知らせていただく数珠つなぎ方法をとったのが功を奏し、当初見込んだ人数をはるかに越える参加者で開催することができました。

ほぼ三十年ぶりの再会とあって、最初は緊張感がありましたが、時間が経つに連れ、参加者全員がタイムスリップしたかのように、小学校時代の思い出話に花を咲かせ、近況などを語り合い、大変楽しい一時を過ごすことができました。（荒木俊哉）

■昭和五十七年卒――

四十路を迎える平成二十一年の新年に、卒業以来初めてとなる同窓会を京都駅ビルにて開催しました。中には二十年以上ぶりの再会もあり、風貌すら変わった様子の人もいましたが、しばらくの歓談を続けるうちに、懐かしく、昔となんら変わらない人柄がすぐに蘇ってきました。三十六人もの仲間が集まって、盛会となりました。（谷垣賢）

東部東櫻同窓会

副会長　山田　直子

京都で総会のある今年は、東京では同窓会を開催せずに、会員名簿を発行します。東部東桜同窓会では、毎年附属の卒業生に講師や、演奏をお願いしています。一昨年は家森幸夫さん「世界から学ぶおいしい話」食べ方上手で健康長寿。昨年は中村伊知哉さん「日本のポップパワー」デジタル情報社会において日本は、京都は、個人は、どのような力を発揮できるのか。というテーマでお話いただきとても興味深く聞かせていただきました。その後は懇談、「じゃんけん」でお楽しみプレゼントが当たります。同窓会の出席者が減少の傾向にあり私たちの悩みです。毎年六月の第一土曜日の午後と決めていますが、ウィークデーの夜にして会社帰りに変更しては？夜では高齢者は参加しにくい、と様々な意見があり、意見はまとまりません。もっと若い同窓生に参加して頂きたいと願っています。お声を掛け合って、是非ご参加下さい。

樫の実会

（旧京都府師範学校附属小学校第二教室出身者同窓会）

平成二十年六月十八日京都のホテルで懇親会を開催。当日は連絡可能な会員百八十四名中三十九名が出席。昭和四年出身者から昭和十八年第二教室閉鎖時の在籍者まで、幅広い年代が二年振りに一堂に会した。小学校時代の思い出話から最近の社会経済まで話題は尽きず、予定時間を大幅に超過する盛会で、最後に再会を約して散会した。（昭和十七年卒　石東哲男）

同窓生点描

昭和五十六年卒

安井　昇

毎年、街角で金木犀の花の香りを嗅ぐたびに小学校時代、放課後や休み時間にドッジボールに明け暮れていた日々を懐かしく思います。お世話になった先生方、卒業生の皆様、お元気でいらっしゃいますか。

私は大学入学と同時に東京に移り住んでまもなく二十二年、現在、自分で木造中心の設計事務所を主宰しながら、早稲田大学等で木造防火を専門に研究員・講師をやっております。実家が建具屋であり小さい頃から木に触れあう時間が長かったこと、京都の素晴らしい木造建築群に囲まれて生活をできたことが、今の自分をつくっているのだと思います。

大学院卒業後、一旦はハウスメーカーに就職をしましたが、三十歳の時に自分で木造建築の設計をやりたいと、設計事務所を興しました。ちょうどその頃、大学時代の恩師から、「京都等の歴史的町並みの建物のほとんどが、現在の建築基準法にあっておらず、合法的に大規模な改修や新築ができない。解消するためには、防火性能と耐震性能に関して研究が必要だ。私たちの専門の防火について何とかしよう」と声をかけていただきました。大学時代、日本では珍しい「木造建築の防火」を専門にしていた京都生まれの私にとってぴったりのテーマでした。すぐに私たち研究者と、京都の大工や左官の職人、設計者、行政等が協力しながら、京町家の昔ながらの土塗り壁や、木材できれいに構成された屋根の軒裏の防火性能を地道に評価・改良しつづけました。木材は断面が大きいとなかなか燃え進まない性質をもっており燃え方をコントロールすれば危険を低減できること、土はもともと燃えないのに加えて、厚さがあると裏に温度を伝えにくいことを工学的に評価し、その研究で平成十六年に早稲田大学から博士号をいただきました。また、その成果がそのまま建築基準法に反映され、まだ少し課題はあるものの、概ね、昔ながらの京町家を大改修・新築できるようになりました。古いからと言って、簡単に壊すのではなく、その建物がもつ性能をしっかりと評価し、必要に応じて改良すれば、安心安全な状態でさらに使い続けることができる。今後の資源循環型社会には必要な視点だと思います。

小学生時代に多くの素晴らしい木造建築に囲まれて生活できることは京都に住む人の特権だと思います。その素晴らしい建物が今後も残り、新たにつくれるよう、少しでも貢献できればと思います。

昭和五十七年卒

山下　隆子

三年前の二〇〇六年に、社団法人京都青年会議所（京都ＪＣ）の第五十五代理事長を務めさせていただきました。その年、京都ＪＣが団体として京都市教育功労者表彰をいただきました。その表彰式で同じく個人として受賞された迫田恒夫先生とお会いし、卒業生として声を掛けさせていただいたことがご縁で、今回この原稿を書かせていただくことになりました。

皆さんは京都青年会議所をご存知でしょうか？附属京都小学校の卒業生でメンバーやＯＢの方も多数いらっしゃいます。この東櫻同窓会の千玄室会長も京都ＪＣのＯＢで、第七代理事長を務められました。私達は、「明るい豊かな社会」の実現を目指す二十歳から四十歳までの青年経済人の団体です。京都ＪＣは規則上、二十五歳からとなっていますが、現在二一〇名からのメンバーで成り立っています。

私達の活動を紹介させていただきますと、月に一度、例会があり、これはメンバーのみが対象となるものと、市民の方々にも参加いただけるオープン例会があります。二〇〇九年は四月・六月・八月・十月は市民の方々と共に、思いやりの心を育み、京都の未来を見据

えた行動に繋がる学びや気付きが得られるオープン例会を開催させていただきます。詳細はこれから決まるのですが、HP等で情報発信しますので、興味のある方は是非ご参加いただきたいと思います。

またそれ以外には、いくつかの委員会に分かれて活動し、行政・NPO団体の方々と協力し、小学生への環境保全意識の啓発事業や青少年に対する夢と志を育む教育の推進、「学生のまち」という京都の特色を活かして、社会貢献活動を展開している学生の方々にスポットライトをあて活動内容等の情報を発信し、京都のまちの活力に繋げていく事業の開催などに取り組んでいます。

小学校の折の様々な行事を通して、地道に努力することの大切さとその先にある清々しい達成感などを学ばせていただきました。その体験が今、JC活動に取り組む原動力になっていると実感しています。

仕事を持ちながらの活動なので、両立が難しいところもあります。しかし、時間を作り、その限られた時間を有効に使って、大好きな京都のまちのために、今しか出来ないことに取り組み、これからも自らの無限の可能性に挑戦していこうと思っています。

昭和五十八年卒　**高橋　良和**

京都大学防災研究所で地震工学に関する研究・教育を進めています。地震工学というと、皆さん何を思い浮かべられるでしょうか?色々なところで「地震はいつ来るのか」、「自分の家は地震が来ても大丈夫か」などと尋ねられることがありますが、残念ながら私の専門は橋梁などの土木構造物でありまして、大地震が来た場合にも阪神大震災のような被害が起きないための研究を進めています。

大学では理論や実験などにより研究を進める一方で、実際の被害から学ぶことも多く、地震被害調査にもよく出かけます。最近では中国四川省、インドネシアスマトラ島、新潟県、石川県など調査に行きました。私達は、地震が発生するとすぐに荷物をまとめて調査に向かわねばなりません。被災された方の立場では一刻も早く復旧・復興を希望される訳ですが、我々は被害の状況を記録し、以後の耐震安全性向上のための基礎データを得なければなりません。国内では地震発生当日、遅くとも翌日に、海外ですと相手国の事情にもよりますが、出来るだけ早く現地入りを目指します。調査を通じて感じるのは、人間の強さです。地震により家族を失い、家屋等の財産に大きな被害を受けた非常時でさえ、今後の被害を軽減するために役立ててほしいと、むしろ積極的に私達の調査を受け入れていただくことが多く、自身の責任の大きさを痛感しています。

さて、最近各地で講演する機会も増え、自分が地震工学という分野へ進んだきっかけを話す機会がしばしばあります。そのためのスライドを用意しているのですが、その最初のページに、小学校時代の校長先生だった蜂須賀先生の写真を載せています。全校集会での話が面白く、人気があったのですが、その中で私にとって強烈な印象に残ったのは、先生が南極越冬隊隊員として南極ですごされた話でした。その後図書室へ行き、南極に関する本の中に若かりし校長先生の写真を見つけた時、さらに興奮し、なんとなく好きだった科学・理科をもっと知りたい、と思いました。また小学校高学年時の担任であった石原先生からも、夏休みの理科の自由研究を応援して頂いたことも心に焼き付いています。その後、高校の同級生より、父親が南極越冬隊に参加している、その専門は地震学らしい、という話を聞き、「地震の研究をすると、蜂須賀先生が話していた南極に行けるのか」と、今考えれば的外れな動機なのですが、そのおかげで大学の学部を選び、今の仕事につながっています。

このように色々な仲間、先生と附属小学校で過ごせた時間が今の自分を形成していると強く感じています。大学でも学生さんに同じような感想を持ってもらえるといいな、と期待して、日夜頑張っています。

恩師点描

附属小という学校

栗山 正則

次回東櫻同窓生のつどい実行委員の方々が、附属小学校を卒業されて約三十年ですか。京都小学校はユニークな学校でしたね、生徒も先生も。

ところで、君達は小学校時代のことで今も鮮明に想い出されることは何ですか?

私は個性的な先生方に出会い、その先生方から学んだことがたくさんありました。また、多くの仲間に恵まれたことも私の財産となっています。きっと君達も同じだろうと思います。たくさんの仲間と出会い、共に成長してきた過程がそれぞれの人となりを形成し、一人ひとりの財産となっていることでしょう。

同じ学年だったという横のつながりだけでなく、先輩・後輩という縦のつながりも、大きな価値となっているのではないでしょうか。

附属京都小学校という大きな大きなまとまりの中の、一時期かかわらせて頂いたその「縁」に感謝しながら、京都小学校にかかわって頂いた方々とともに、ますます発展することを願っています。

モンゴルの風に輝いて

林 賢三

昭和五十五年から六十二年までお世話になりました。担任は「に組」です。に組は障害のあるこども達の学級で、給食や遠足などで交流をしていました。

当時、「に組」のこども達と毎週水曜日に「船岡山」に行っていたことが思い出されます。「に組」を担任されていた田中収先生が考えられた山登りは非常に効果的な指導でした。先進の気風が溢れていました。

退職しまして、JICAのシニアボランティアとしてモンゴルに赴き、特別なニーズ教育の教育課程を作成してきました。一年四ヶ月で活動を終了しました。青い空と緑の草原と白いゲルの中に暮らす子ども達の目の輝きが忘れられません。学校が近くになく、年に一回一週間の移動教室を心待ちにしながら待っている子ども達に比べ、「なぜ、日本の子ども達は学ぶことを喜ばないのだろう」と不思議に思えます。

目を輝かせて学ぶモンゴルの子どもに、自分を取り戻させてくれたことを感謝します。

懐かしい臨海学舎

岩淵 信明

附属小学校に十一年間お世話になりました。あれから二、三十年。四、五年生と臨海学舎に行ったことが記憶に残っています。七月二十日前後、三泊四日の宿泊学習でした。水泳指導はもちろんのこと、磯浜の観察、ボート指導、キャンプファイヤーなど子どもにとって魅力的な活動が盛り沢山。背の立たない磯での水泳、遠泳などは安全第一に綿密な計画を立て、一瞬の油断も許されません。しかし、夜は宿舎で楽しくゆったり。子どもが寝静まった頃に「静かに寝てるか?」と大声で見回り寝かし付けます。「せっかく寝ていたのに起こさないでください」と子どもの声。その夏に家族でもう一度連れて行ってもらった、と子どもから聞くこともしばしばです。子ども達にとって、遠くまで泳げたこと、磯浜の生物の観察、大海原の雄大さ、友達と一緒に活動したことなど大きな感動だったのでしょう。平成二十年の春に定年退職をし、今は、附属小学校近くの大谷大学で教職などの授業を行っています。附小の子どもに声をかけ、「今朝、不審者に声をかけられた」というのもまずいなあと思うこの頃です。

常任理事会・実行委員会報告

平成二十年六月十六日の総会以後の動きについて報告します。

1　平成二十年七月六日、総会・つどいの総括を保養施設「きよみず」にて行う。常任理事（行事関係）・実行委員（旧・新）合わせて二十人が参加

2　総括の会を受けて、常任理事会を母校会議室にて開催。出席二十人（二十七人中）

総会の反省を行うとともに、常任理事の各担当を決める（本紙四ページ参照）

3　名簿の整理

平成二十年七月九日、総会までに葉書等で住所等の変更申し出のあった分について整理し、十月八日、不明分についての確認・調査を各学年理事に依頼する。

4　東櫻だよりの編集

平成二十年九月十五日を皮切りに、常任理事と新実行委員が三回に亘って編集会議をもった。各学年にも記事作成を依頼した。

5　附属京都中の同窓会との関係について

平成二十一年二月十五日の常任理事会では、母校が小中一貫校への取組を着実に進めておられる中で、小中の同窓会はどうあるべきかについて話し合いました。結論的には、小・中双方の同窓会に「統合検討委員会」を設立し、乗り越えなければならない課題について話し合うことになりました。実際に話し合うのは、新年度に入ってからになると思われますが、折りに触れてその内容についてはホームページ等を通してお知らせしますので、是非目を通していただきたいと存じます。

東櫻同窓会会計報告

自平成20年４月１日
至平成20年９月30日

（金額単位円）

【収入の部】

前回よりの繰越金	6,913,298
会費収入	9,000
受取利息	7,538
合計	6,929,836

【支出の部】

前回（H20621）総会経費	413,621
委員会活動費	6,605
通信郵便費	40,308
次回への繰越金	6,469,302
合計	6,929,836

会計担当　野村英男（昭和17年卒）

恩師のご消息

ここ一・二年の間に、戦後の厳しい時代の附属京都小学校を支えてくださった先生方が、何人もお亡くなりになっています。心よりご冥福をお祈り致します。

佐伯正一先生

平成十九年四月二十四日ご逝去

昭和三十年代、四十年代と二回に亘って校長職に就かれた。長い間、附属京都小学校の授業研究の指導に当たられた。

磨野久一先生

平成十九年六月十八日ご逝去

昭和二十五年度から三十一年度までご勤務。

青池太郎先生

平成二十年三月三十一日ご逝去

昭和十九年度から三十三年度までご勤務。

瀬戸口孝子先生

平成二十年四月五日ご逝去

昭和二十八年度から五十二年度までご勤務。

蜂須賀弘久先生

平成二十年八月一日ご逝去

教諭として昭和二十八年度から四年間、校長として昭和五十三年度から四年間ご勤務。後年、京都教育大学学長も務められる。

大槻弥一郎先生

平成二十年九月二十三日ご逝去

昭和二十一年から三十三年までご勤務。後年、京都府教育委員会委員長を務められる。

滝上　登先生

平成二十一年二月三日ご逝去

昭和十四年から二十八年までご勤務。京都市に移られてからは、小学校校長会長を務められる。

東櫻同窓生のつどい

同窓会総会の様子

受付の様子

鏡開きの後の乾杯

アンサンブル東櫻によるコーラス

吉阪一郎氏による解説

能楽　五人囃子の演奏